

2019年度 第1回 ランチタイムフリートーク 報告書

1. 主 催 外国語学部
2. 講 師 名 石井 紀子 教授 (外国語学部英語学科)
3. 日 時 2019年5月11日(火) 12時45分～13時20分
4. 場 所 2-915 (英語学科会議室)
5. 出 席 者 18名
(出席者詳細は別紙)

6. 内 容

「戦間期の海外伝道衰退の危機：日米の女性たちによる抵抗運動」

1. アメリカ女性宣教師による海外伝道の衰退期は、これまで研究対象として取り上げられてこなかった。今回の共同研究は、西洋中心的(北米・ヨーロッパ)な海外伝道研究に、伝道地である東アジアの現場から新たな視点を提供する試みであるという。

通説によれば、アメリカ女性宣教師の海外伝道の最盛期は19世紀後半から1910年代頃までと考えられている。日本では明治期の女子教育において、アメリカ女性宣教師の貢献が知られている。アメリカ女性宣教師による活動は、1920年代に衰退期を迎えるが、その理由として一般に以下の3つの点が挙げられる。まず第一次世界大戦の勃発に伴う伝道資金の枯渇、二つ目に女性伝道局の解体と男性伝道局への吸収合併、三つ目に高等教育を受けた女性の増加に伴う海外伝道以外でもこうした女性が活躍する場が拡大したことである。

共同研究では、こうした西洋からの視点から唱えられてきた通説に対して、東洋からみた視点から伝道の現場である東アジアの事態を調査するという。石井先生は、とりわけ日本の視点から神戸女学院の事例を発表なさるといふ。

女性伝道局が解体するまえに、1920年シカゴに、Kobe College Corporation が、1927年神戸に Kobe College Foundation がそれぞれ設立される。神戸女学院設立50周年に向けて、日米の両財団は、Kobe College Expansion Campaign という神戸女学院拡張、移転計画を立ち上げ、日米の政財界・卒業生・支援者から幅広く支援を募り、100万ドルの資金を集める。1934年岡田山にキャンパス建設が実現する。1929年の世界大恐慌や1931年満州事変に伴う日米関係の悪化などを踏まえると、この計画実現のために多大な努力が費やさ

れたことが窺えよう。

支持母体について、19世紀からの海外伝道局から世俗機関へと移管される。思想について、通説によれば、19世紀は「女性による女性のための仕事」(Women's Work for Woman)という伝道思想をスローガンとして女性宣教師が活躍していたが、第一次世界大戦後には「世界の友情」という思想にとってかわられたとされている。しかし、神戸女学院の事例をみると、この学校拡張計画からも窺えるように「女性による女性のための仕事」という思想が堅持されたのではないか。

2. 二言語（英語、日本語）で行う授業の試み

・授業概要

2018年度秋学期に石井先生が担当された「American Women's History 2」を事例にとって、二言語で行う授業での試みについての報告がなされた。この講義科目は、英語で行う北米研究コースコア科目として提供されているが、他学部他学科の学生にも開放されている。講義内容は、1830年代から21世紀初頭までのアメリカ女性史である。時系列に沿って、テーマごとに一回完結で授業を進めていく。

ムードルに提示した論文（英語）をあらかじめ読むことが学生に課される。授業では、教員による導入の後に、有志の学生に課題の論文について発表をしてもらう。発表での問題提起に基づきディスカッションを行う。

・授業の現場での難しさ

シラバスで使用言語が英語であることを提示しているにも関わらず、例年、8割近くの学生から日本語も使用してほしいとの要望がある。こうした要望に沿って授業を進めてきたのだが、2018年度の秋学期の受講生のなかに日本語がほぼ分からないFLA留学生がいたため、授業のやり方を考え直す必要が生じた。学生の反応を確かめつつ、以下のように授業工夫しつつ進めた。

a. 講義とプレゼンをすべて英語と日本語で交互に行い、いずれも英語から始める。b. 両言語用いるが、日本語から始め、同じ内容を英語で繰り返す。c. 両言語用いるが、日本語で深い議論まで講義し、英語では要点のみ指摘する。

・課題と利点

多様なバックグラウンドをもつ学生同士の交流を促すことができる。研究言語の選択と研究視点の形成について考えるよい機会になるのではないだろうか。

【フリートーク】

A 先生：プレゼンの内容と事前指導、ディスカッションの方法についてお伺いしてもよろし

いでしょうか。

→論文を読んでくるのが前提となります。その上でその論文について問題提起をしてもらいます。モチベーションの高い学生については、そのテーマについて各々が考えてきたことも発表してもらいます。学生には二つ問題提起をしてもらいます。学生があらかじめプレゼンの指導を受けにくる場合には、問題提起についてある程度調整することが可能なのですが、事前指導を十分に受けないままプレゼンに臨み、的外れな問題提起をする学生もいます。そうした場合には、私の方からも歴史的コンテキストから考えることができるように問題提起をします。また、場合によっては、プレゼンの前に視点を提示したり、違った視点を持った学生にマイクを回したりします。

B 先生：なぜ北米研究コースのコア科目を他学部・他学科の学生にもオープンにしたのですか。

→この科目は、わたしが非常勤講師の頃から担当している講義で、そもそも他学部・他学科の学生に開かれていました。その時、他学部・他学科の学生がずいぶん異なった視点をもっていることに気が付きました。多様な視点、アプローチを学生へ還元するのにいい方法だと考えたからです。

C 先生：授業言語が英語という指定があるにも関わらず、英語ができない学生が受講するのはなぜでしょうか。

→学生によれば、女性運動や女性活躍といった歴史を扱う講義が少ないことにあるようです。さらに、アメリカは女性が活躍する国であるというステレオタイプな考えがあるので、その理由を知りたい学生が多いようです。

D 先生：ディスカッションのやり方について詳しくお伺いしてもよろしいでしょうか。グループ分けなどは、どうしていますか。

→グループ分けはしていません。ただし、毎回違う学生と、とりわけ他学部・他学科の人と話すように念を押しています。

A 先生：受講する学生が 120 人を超えていますが、あらかじめ論文を読んでいるかどうかの確認はどのようにしていますか。

→レポートを書くためには 3 本論文を読むことが必須条件としています。それでも学生にとって難しいので、講義の最初の 2、3 回で論文の読み方を指導しています。やはり、課題をしっかりとこなす学生とそうでない学生の間では差が出てしまいます。

E 先生：わたしも二言語で行う授業を受け持っています。ディスカッションなども参加する学生が限られてしまいます。研究言語の違いによる観点の違いの指摘はとても勉強になり

ました。

→初回のガイダンスで科目のキーとなる部分を説明するようにしています。

【司会：F先生のコメント】

Professor Ishii gave us the opportunity to think about and discuss the problems of teaching in English with English language materials to classes with different levels of English experience. In the current rapidly changing classroom environment in Sophia many of us are trying to find ways to work with more difficult English texts or more theoretical perspectives, with Japanese students who may not have been exposed to these and an increasing number of students from overseas, who may or may not have a higher reading level in English, but cannot often read or communicate in Japanese. Professor Ishii offered several practical examples of how she dealt with these mixed classrooms and this started a discussion, which we should probably continue to think about as part of the FD committee work. Professor Ishii's approach is inspiring as she creates manages to work with real ongoing academic research and make this interesting and stimulating to undergraduate students, and particularly relevant to our women students perhaps.

以 上